

## 「偕楽園」有料化に託した期待

日本三名園の中で唯一、無料で開放されていた水戸市の偕楽園が、遂に有料化されることになった。有料化は11月1日から実施し、春の「水戸の梅まつり」期間は県民を含むすべての入場者から、それ以外は県外客を対象に大人300円、小中学生150円を徴収する。県は年間約8500万円の収益を見込み、開園当初にあったあずまや休憩所など歴史的空間の復元や、参道へのエスカレーターを設置によるバリアフリー化などを検討し、公園の魅力向上につなげたい考えだ。

偕楽園は2015年に日本遺産に登録されたが、有料化をめぐる議論はその以前からあった。しかし、1842(天保13)年に偕楽園を開設した水戸藩9代藩主徳川斉昭の「民と偕(とも)に楽しむ」との精神を尊重しようとの意見や、「市民の公園であることをもっと大切にしてほしい」などの要望が県にあり、県も有料化には慎重だった。そんな中、今年2月に県が入場の有料化の方針を固め、有識者でつくる偕楽園公園魅力向上懇談会に意見を求め、料金徴収の実証実験を行うなど準備を進めてきた。

ただ、料金の徴収方法をめぐっては異論がくすぶっていることは否めない。県内と県外の人を区別することなく一律で徴収するべきとの声も市民の中には少なからずある。開設当初の精神を重んじるべきとの考えも根強いが、県の担当者は「日本遺産になり、観光への県民の意識も変わり、偕楽園の魅力づくりをするための一つの選択肢としてご理解をいただけたのではないか」と話す。

偕楽園には毎年約100万人の観光客が訪れるが、外国人はわずか6000～7000人にすぎない。海外からの観光客を誘致するためにも公園の魅力をどう向上させるかは大きな課題だ。有料化を機に、観光客の満足度を上げるため、未来に向けた偕楽園の魅力向上への議論がさらに深まることを期待したい。

茨城新聞社 論説委員長 藤枝智昭



毎年約100万人の観光客が訪れる「偕楽園」。今年11月1日からの有料化が決まった